

聖書：マルコの福音書 1：40～45

説教題：わたしの心だ。きよくなれ

日時：2025 年 5 月 25 日（朝拝）

今日の箇所「ツァラアト」という言葉が出て来ます。これは新改訳聖書を読む人以外はほとんど知らない言葉かと思います。以前ここは「らい病」と訳されていましたが、聖書が語るこの病を特定の病名で表すことは不適當であることが分かって来たため、第三版から暫定的な訳語だとしながら、ヘブル語の発音のまま「ツァラアト」と訳されることになりました。この病についてはレビ記 13～14 章に詳しく記されています。その特異な点はそれが人間の体ばかりでなく、衣服や家屋にも現れることです。新改訳聖書のあとがきに、ツァラアトについて以下のコメントが載っています。「聖書のツァラアトは皮膚に現われるだけでなく、家の壁や衣服にも認められる現象であり、それが厳密に何を指しているのかはいまだ明らかでない」。

このツァラアトについて聖書から分かることは皮膚に腫れもの、かさぶた、光る斑点ができて、その患部が皮膚より深く見える状態になること、そしてそれがだんだん広がることです。それはやがて皮膚を腐らせ、その下にある肉や骨までも蝕み、ついには死に至ります。そればかりかそれは服や家の壁にまでも現れるという恐ろしい感染力を持ちました。そこでこの病にかかった人は人々から隔離され、町の外で寂しく暮らすことを強いられました。レビ記 13 章 45～46 節：「患部があるツァラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。その患部が彼にある間、その人は汚れたままである。彼は汚れているので、ひとりで住む。宿営の外が彼の住まいとなる。」 こうしてこの病はその人から健康ばかりか日常生活を丸ごと奪いました。その人は仕事を失い、人々との関わりを失い、親しい家族との交わりも失い、礼拝共同体からも遠ざけられるという絶望的な状態に置かれました。まさに生ける屍でした。

そんなツァラアトに冒された人がイエス様のもとに来て、ひざまずいて懇願します。「お心一つで、私をきよくすることがおできになります。」 この言葉から彼の心の中を伺うことができます。まず分かることは彼はイエス様はこのツァラアトをきよめることができるという信仰を持っていたことです。彼はイエス様がすでに多くの病人を癒やし、また悪霊につかれた人から悪霊を追い出した話を聞いていたのでしょう。1

章 34 節：「イエスは、様々な病気にかかっている多くの人を癒やされた。また、多くの悪霊を追い出し、悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。」 1 章 39 節：「こうしてイエスは、ガリラヤ全域にわたって、彼らの会堂で宣べ伝え、悪霊を追い出しておられた。」 ガリラヤ全域にこの知らせが伝わる中、彼はこの私もイエス様によるならきよめていただけるという希望と確信を持ったのです。そのことを心から信じたのでイエス様のもとまで来しました。人々の前に出て来て、懇願することは相当に勇気のいることだったと思います。

しかし彼の中で確信を持てないことがありました。それは「お心一つで」という部分に表れています。そこには印がついていて欄外の 40 に別訳として「もしお望みくださるなら」とあります。これは直訳すれば「もしあなたが意志してくださるなら」となります。「あなたが御心としてくださるなら」「あなたが良しとしてくださるなら」ということです。彼はイエス様にツァラアトをきよめる力があることは疑っていません。しかしイエス様がそのことを意志してくださるかどうかについては確信がありませんでした。それをご自身の願いとして欲してくださるかどうかについては良く分かりませんでした。何と言っても自分はツァラアトです。およそ人間の中で最も汚れた状態にある者です。こんな者のきよめをイエス様が果たして御心としてくださるかどうか、それは定かでない。そんな思いを持ちながら彼はやって来たのです。

これに対するイエス様の応答が 41 節にあります。「イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、『わたしの心だ。きよくなれ』と言われた。」 このイエス様の応答に二つの注目すべき点があると思います。一つ目はイエス様は「わたしの心だ」とまず答えられたことです。そこにも印がついていて欄外の 41 に別訳として「わたしは望む」とあります。これは先のツァラアトに冒された人の言葉、「もしお望みくださるなら」と呼応する言葉です。イエス様はこうしてツァラアトに冒された人が確信を持てないでいた思いに対してははっきりと答えてくださったのです。「わたしはあなたのきよめを望む」「わたしはそれを意志する」「わたしはそれをわたしの願いとする」と。ここに私たちが今朝心に留めるべき大切な一つのメッセージがあると思います。神が力ある方であることは言うまでもありません。神にはどんなことでもできます。神にとって不可能なことは一つもありません。しかし私たちにとって重要な問いは、果たしてその神がこんな私のきよめを御心としてくださるのかということです。こんな私の救いをご自身の心としてくださるのかどうか。そんな私たちの問いに対してイ

イエスははっきりと「わたしはそれを望む」「わたしはそれを意思する」と仰っておられるのです。

これは聖書の他の箇所でも言われていることです。テモテへの手紙第一 2 章 4 節：「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」この「望んでいる」という言葉も、今日の箇所の「わたしは望む」「わたしの心だ」と訳されている言葉と原語では同じです。神の御心、神の意志を表す言葉です。神はすべての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。この「すべての人」とは、その前の部分を見ると分かりますが、あらゆる種類の人々を指します。神はこちらの種類の人々の救いは望むが、そちらのカテゴリーに属する人々の救いは願わないということはないのです。神はどんな人の救いも望んでおられます。ですからツァラアトに冒されている人もそうです。人々から避けられ、社会から疎外され、生きる望みを持たないような人もです。ヨハネの福音書 6 章 37 節後半には「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません」というイエス様の言葉もあります。私たちはそのことを感謝して信じたいと思います。こんな私が近づいても、受け入れられないのではないかと心配する必要はないのです。こんな私でもきよめていただければでしょうかと近づく私たちに、イエス様は「わたしの心だ」「わたしはあなたのきよめを願う」「それを欲する」と言ってくれるのです。このことを覚えて私たちは恐れずにイエス様に近づいて良いのです。

二つ目に注目すべき点はイエス様が手を伸ばして彼にさわるという方法で、このきよめのわざをなさったことです。聖書の他の箇所から分かることは、イエス様が彼に触ることは不要だったということです。イエス様は単に「わたしの心だ。きよくなれ」と言葉を発するだけで十分でした。しかしイエス様はあえて手を伸ばして彼に触ってこのみわざを行われました。それはなぜでしょうか。その理由はその前に書いてあります。「イエスは深くあわれみ」と。イエス様は彼のことを思われました。そしてその愛のお心によって手を伸ばして彼に触れられました。この行為が彼にどんなに大きな意味を持っているかをご存知だったからに他なりません。このツァラアトの人が健康な人の肌に触れたのは何年ぶりだったでしょう。彼は自分から他の人に近づくことはできませんでした。むしろ間違って人々が自分に触れて汚れた者にならないように「汚れている、汚れている」と叫びながら歩かなければなりませんでした。もし人に触れたら大声で怒鳴られ、石を投げ付けられ、散々な目に遭うでしょう。なのにそん

な自分にイエス様は触ってくださった。これはどんなに大きなメッセージを彼に伝える行為だったのでしょうか。わたしはあなたと一緒にいる。あなたとともにいる。そのような主のお心を表すものだったでしょう。

触られる側にとってこれは大いなる恵みであっても、もう一方の触る側にとっては大変なリスクを伴います。それによって自分は汚れた者となるかもしれません。病気が移るかもしれません。宗教的に汚れた者となり、今後社会から、礼拝共同体から切り離された者となるかもしれません。しかしイエス様は少しも躊躇せずにこのことをなさいました。たとえその結果、ご自分が大きな犠牲を払うことになってもです。その結果はどうだったでしょう。汚れがイエス様に伝染するどころか、逆にイエス様のきよさが彼に移されることとなりました。42 節に「すると、すぐにツァラアトが消えて、その人はきよくなった」とあります。ここにもイエス様が伝えている神の国の力が現れ出ました。人々を呪いの力から解放し、いのちへと回復する力です。

しかしなぜイエス様はこのような祝福を地にもたらすことができるのでしょうか。イエス様は神だからでしょうか。神にはどんなことでもできるからでしょうか。そういうことではないと思います。イエス様がこのような祝福をもたらすことができるのは、やがてご自身が私たちの罪の呪いを身代わりに引き受けてくださるからです。確かにここでイエス様はツァラアトの人に触れて、ご自身が汚れた者になったとは言われていません。しかし後に私たちの代わりに呪われた者となってくださったと言われています。ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節：「キリストは、ご自身が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。『木にかけられた者はみな、のろわれている』と書いてあるからです。」 イエス様はこのようにやがてすべての代償を払ってくださいます。そのようなお方としてイエス様は彼に手を触れて、きよめることができたのです。またこのように深い憐れみをもってツァラアトの彼に手を伸ばしてくださったお方として、イエス様はこの後、十字架上の死にまでも進んでくださるのです。ですから今日のみわざも決してイエス様の側での犠牲なしのことではありませんでした。一方では彼の汚れをイエス様がご自身に引き受けつつ、他方ではご自身のきよさを彼に移して、彼をきよめ、彼を神の国の祝福に生かしてくださったのです。

イエス様は 43 節で「彼を厳しく戒めて、すぐに立ち去らせた」とあります。そして

「だれにも何も話さないように！」と命じます。これは前回見た 25 節や 34 節と同じです。ただこの出来事を伝えるなら、人々はイエス様を奇跡を行う人としてのみ見るようになります。その結果、誤ったメシア観が助長されてしまいます。また人々がそのような期待をもってたくさんイエス様の周りに集まることによって、イエス様の本当に大切な使命が果たせなくなる恐れがあります。だから今はまだ人々に話さないようにと言われました。イエス様はどういう方なのか、どんな救い主なのか、正しく理解されることとセットで癒やしのみわざも受け止められて行くことをイエス様は願われたのです。「ただ行って、自分を祭司に見せない」と言われます。それは当時は祭司がツァラアトの人のきよめを調べ、確認し、そのきよめを宣言する役割を担ったからです。その律法に従うようにとイエス様は言われます。それによって彼が社会復帰できるためです。

ところが最後の 45 節に「彼は出て行ってふれ回った」と記されます。彼としてはこのことを人々に話さずにいられません。嬉しさのあまりでしょう。しかしこうして彼はイエス様の活動を妨げてしまったのです。イエス様はこのために表立って町に入ることができなくなりました。残念な結果です。せっかく素晴らしい恵みを受けたのに、イエス様に迷惑をかける形でお返しするとは……。これが人間の悲しい現実であるということでしょうか。イエス様はこのため、町の外のさびしいところへと追いやられてしまいました。にもかかわらず、人々はいたるところからイエス様のもとにやって来ました。隠れようとしても隠れられないイエス様です。決して望んだ状態ではありませんでしたが、こうしてこの世に来られた神の子キリストなるお方は隠れた状態で居続けることはできませんでした。それは当然のことでもありました。

私たちは今日の箇所から何を学ぶことができるでしょう。今日の箇所を理解する道は、このツァラアトに冒された人とは他ならぬ神の御前にある自分の姿そのものだと知ることです。私たちも神の前では頭のとっぺんから足のつま先に至るまで罪で覆われていないところはないほどの不治の病に冒されている者たちです。自分を蝕む罪の力の下にあって、どうしようもない者たちです。「汚れている！汚れている！」と叫びながら歩かなければならないような者です。しかし今日の箇所に示されているグッド・ニュースは、そんな者がきよめを求めてイエス様に近づく時、イエス様は退けないということです。むしろこんな私のきよめについて「わたしの心だ」「わたしは望む」「わたしは欲する」と仰ってくださる。そしてたとえ私たちの代わりに私たちの

汚れを引き受けることになったとしても、慈しみの心をもって、ご自身のきよい手で私たちに触れてくださり、きよめてくださる。このイエス様を見上げて私たちは恐れずイエス様のもとに行く者でありたいと思います。どんなに自らに幻滅し、絶望しても、そんな私をきよめ、いのちに生かしてくださる救い主がおられます。このイエス様のもとへ行って神の恵みのご支配、神の国の祝福に生かされたいと思います。そしてやがて完成する最終的な神の国、天の御国に入る者とされ、神が意図してくださった完全に健康な状態、心も体も完全にきよめられた状態をいただいて、私たちを愛し、慈しんでくださる主と永遠にともに生きる幸いに生かされる者たちとされて行きたいと願います。